

「手に取る宇宙 / Message in a Bottle」 地上ミッションを 『奈良県大芸術祭』において実施する

「手に取る宇宙 / Message in a Bottle」は、京都市立芸術大学の研究グループ「宇宙への芸術的アプローチ（AAS）」と宇宙航空研究開発機構（JAXA）との共同プロジェクト＝宇宙環境の芸術的利用の可能性についての共同研究の一環として2001年に開始され、現在も継続されているプロジェクトです。

プロジェクトの第1段階においては、国際宇宙ステーション（ISS）に滞在する宇宙飛行士にシリンダー状の密閉容器を託し、宇宙飛行士は船外活動をおこなう際に、宇宙の真空をシリンダーに詰め、地球に持ち帰ります。

上記宇宙ミッションの第1回目は、容器が破損したために残念ながら失敗に終わりましたが、2度目のミッションは見事成功し、現在、ミッションを終えて地球に持ち帰られた「宇宙」＝「手に取る宇宙 / Message in a Bottle」がこの地球上に1点存在します。

そして、プロジェクトの第2段階が、今回提案する展示企画です。地上ミッションとして、ガラスシリンダーに封じ込められた宇宙＝「手に取る宇宙 / Message in a Bottle」を、地球上のあらゆる場所に持って行き、多くの人々の手に取ってもらい、地球の外に広がる無限大の宇宙を自らの手の中におさめたときに感じたこと、思ったことなど、感想を自由に綴り、手に取った年月日、場所などの情報とともにアーカイブ化していくプロジェクトが現在動き出そうとしています。

この始まったばかりの地上ミッションを、この度の『奈良県大芸術祭』において実施したいと考えています。

具体的なプランとしては、ある地点でバルーン型のテントのようなものを膨らませ、その中で宇宙ミッションの記録映像を上映するとともに、「手に取る宇宙 / Message in a Bottle」を実際に手に取ってもらい、B5用紙に感想を書いてもらうワークショップなどを行うというものです。

鑑賞者から寄せられた感想は、その場でスキャンされ、バルーン内の星空を投影した空間に映し出されます。また、B5の原本は、特製の筒に入れてシーリングし、鑑賞者各自が持ち帰ることができます。

Facebookのファンページには、このプロジェクトに関する声明文やプランドローイング等も載っていますので、ぜひご覧下さい。

<https://www.facebook.com/Message.in.a.Bottle>

本プロジェクト代表者である松井紫朗氏の表現の中心にあるのは、私たちが身の回りの世界（空間・時間・モノの存在など）を知覚する際、定型化・習慣化した認識の枠組みを超えた、より柔軟かつ鋭敏な知覚のあり方を喚び起こし、私たちの想像力を押し広げていくような仕掛けや状況を創り出すことですが、「手に取る宇宙 / Message in a Bottle」は、私たちが生きる地球という一つの限定された空間とその外に広がる無限の宇宙をつなぎ、さらに様々な人が地域と時代を超えてこのプロジェクトにコミットしていくことで、そこに触れる人々の想像力を空間的にも時間的にも大きく揺さぶり、拡張していく力を有しています。

奈良は古代の名残を残す独特の都市空間でもあり、また、現代に至るまでの壮大な時間と記憶が蓄積する場所でもあります。

『奈良県大芸術祭』においてこのプロジェクト展示、すなわち、奈良の街中の様々な場所で多くの人に宇宙の断片を手にとってもらうというこの試みを実現させることができれば、人々が宇宙空間のみならず、自分を取り巻く身近な世界にも、普段は意識することのない複雑な時空間の広がりが存在することを体感できる、非常に豊かな体験型作品になると思います。

松井氏は、いつの日か東大寺の大仏様にも「宇宙」を手にとってもらいたいという構想を持っています。

奈良時代に建立された巨大な盧遮那仏は、人々にとって自分たちが生きる世界とは別の世界へと通じる信仰の対象であり、仏教思想においても無限を象徴する存在、宇宙そのものを体現する存在とされています。

現代の私たちにとっては別世界と現実世界の狭間にある宇宙の断片を、大仏様の手の中に収めるという行為は、多くの人々の想像力や思考の枠組みを押し広げる、大きなきっかけになるはずです。

大仏殿を背景にバルーン型テントが立ち上がっている様子は無条件に人々を惹きつけ、三笠山に昇る月を背景に巨大行燈よろしく宇宙の映像がバルーンテントの天井に映し出されるという幻想的な光景は、奈良県大芸術祭のシンボリックな作品展示となることでしょう。